

沼津市

明治史料館通信

1985. 4. 25(季刊 年4回発行)Vol. 1 No. 1 創刊号



《創刊によせて》

地方の時代と博物館の役割

昨今地方の時代が叫ばれ、全国いたるところで新しい地域の活性化を目指した「まちづくり」が始まっています。沼津市においても「沼津らしさ」を求めてまちづくりの論義が高まっています。

このようななかで、昨年10月明治史料館が開館となりました。明治史料館は、郷土の偉人江原素六先生や、維新直後に静岡徳川藩によって創設され、最高水準の教育を誇った沼津兵学校とその人材をはじめとして、明治の先人たちの業績を中心に紹介する博物館として建設いたしました。

いま私たち沼津市民に求められているのは、沼津にしかない、沼津が全国に誇ることできる「宝もの」を発見しつつ、それによって自分たちの町に自信を取り戻し、郷土を愛する心を育むことにあるのではないのでしょうか。江原先生も沼津兵学校も、共に沼津が誇ることできるすばらしい「宝もの」です。

明治史料館が新しい沼津の発見の場となり、また今後の館活動の中で、その成果があげられるよう期待します。

昭和六十年四月

沼津市教育長 桑原良文

江原素六とその周辺 ①

発見!!

江原素六のチョンマゲ姿!?

明治史料館では、これまで江原素六文書の整理作業を行ってきたが、その過程でさまざまな新

史料が発見されました。今回紹介するのは、その中のひとつで、江原素六を写した最古の写真ではないかと思われるものです。

残念なことに、署名等がないので、これが江原素六だと断言することはできないのですが、その顔かたちからみてもまず間違いないと



思われます。濃い眉毛、鋭い目つき、鼻すじが通ったところ、ほおから口へかけての感じ、身長が低い点などがその決め手です。戊辰戦争時に撒兵隊の仲間といっしょに写したものであろうか？あるいはそれ以前か、それとも沼津へ来てからのものだろうか？

従来知られていた最も古い素六の写真 (明治4年渡米時)



▲今回発見された江原素六?の写真 (右端)

さかやき
月代をせまくそり、当時流行の講武所風という髪型をしている。

▼いっしょに発見された古写真 (4枚)

いずれも誰を写したものは不明だが、幕末～明治初期のものだろう。ひょっとしたら、江原素六の周辺の有名な人物かもしれない。



シリーズ

沼津兵学校とその人材

まぼろしの静岡藩海軍学校と

『蒸気器械書』の謎

明治二年夏に刊行された訳者不明『蒸気器械書』は、船舶機関についての最初の本格的な翻訳テキストである。内容的にも当時の日本としては驚くほど高レベルのものであり、科学技術史上高く評価されている。

『蒸気器械書』には、「海軍学校」刊と「海軍兵学寮」刊の二種類が存在するが、従来、この「海軍学校」とは沼津兵学校のことであるといわれ、『蒸気器械書』は沼津で

出版され沼津兵学校で使用されたものであり、それが後に明治政府に採用され、そのまま東京の海軍兵学寮の教科書になったのだといわれてきた。

ところが、現在では、専門家の研究により、「海軍学校」とは海軍兵学寮の名称が正式決定するまでの仮称であり、沼津兵学校とは全く別個に存在した明治政府の海軍士官養成学校のことであるとされている。従って、『蒸気器械書』も

沼津兵学校とは全く無関係の書物であるとされるに至った。

では、何故、「海軍学校」沼津兵学校という誤った説が信じられてきたのだろうか。

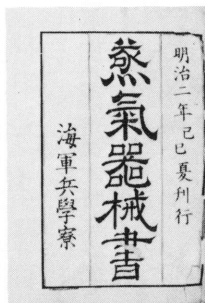
理工系の学科において優秀さを誇った沼津兵学校は、後に工兵科・砲兵科・機関科などの分野で活躍したエンジニアとしての軍人を多く生み出した。そのような事実が背景となつて、明治二年段階において『蒸気器械書』のような優れた翻訳が可能なのは、旧幕以来の人材を擁した沼津兵学校以外に考えられないと思ひ込まれたのであろう。実際、後世の人からそのように誤解されるだけの教育レベルを沼津兵学校はもっていたのであるが。

誤解を生じたもう一つの理由に、明治二年正月の静岡藩職員録中の「海軍学校頭 佐々倉桐太郎 肥田浜五郎」という記載がある。同じ職員録に「陸軍学校頭取 西周助」とある陸軍の学校は、すでに沼津兵学校として実現していたのであるが、一方の海軍学校については、実在したという記録はない。

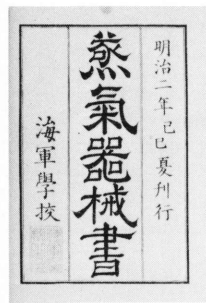
旧幕府海軍の艦隊は榎本武揚に率いられ、荒井郁之助・沢太郎左衛門・甲賀源吾・松岡警吉等の主力メンバーも箱館に脱走していたので、とても静岡藩には海軍学校をつくれるだけの物と人が存在しなかったのである。

佐々倉・肥田とも長崎海軍伝習所・咸臨丸渡米以来の幕府海軍のエリートだったが、海軍出身で同じ非脱走組の矢田堀鴻・伴鉄太郎・塚本桓甫・赤松則良らが陸軍学校としての沼津兵学校の教授におさまったのに対して、佐々倉・肥田は沼津兵学校の教授にはなっていない。海軍学校の設立にこだわったからだろうか？ 本当に静岡藩に海軍学校設立の計画があったのかどうかすらすらわからないが、いずれにしても、事実としては職員録の記載に反し海軍学校は存在せず、また沼津兵学校が海軍学校と呼ばれるいわれもなかった。

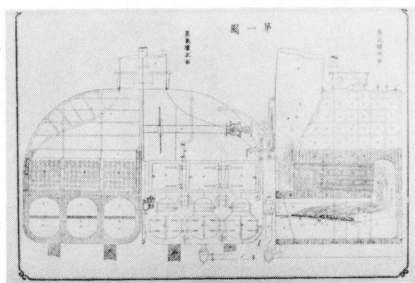
残念ながら、沼津兵学校はもちろん、まぼろしの静岡藩海軍学校も、『蒸気器械書』を刊行した「海軍学校」とは何ら関連性を見い出すことはできない。



▲海軍兵学寮版



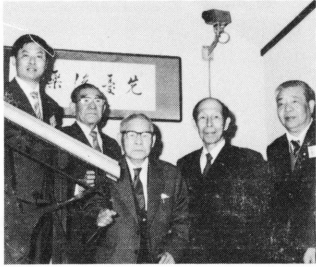
▲海軍学校版

▲附図『海軍蒸気器械図』
たいへん精密なものである。

お知らせ欄

◎中国岳陽市の友好代表団が来訪

沼津市との友好都市提携調印のため四月二日から来日していた中国湖南省岳陽市の代表団一行八人は、五日の調印式に臨んだ後、七日午後当館を訪問しました。当日は職員のほか、江原素六先生顕彰会や地元金岡地区の自治会関係者約四十名が拍手で出迎え、館内は日中友好の熱気で沸き返りました。



江原素六自筆「先憂後楽」の額前で（左から儲波岳陽市長、庄司沼津市長、後藤・上原旧新顕彰会長）

一節であったことを紹介し、岳陽市との深いきずなを強調しました。代表団の一行は「先憂後楽」の由来や、江原素六が少年時代に論語孟子などの古典を教科書として学んだことに変感激し、団長の儲波岳陽市長は、「古い友好の歴史があつて、今日の友好がある。今度は是非岳陽市においてになり、岳陽楼に書かれた「先憂後楽」をみなさんに見ていただきたい。」とお礼の言葉を述べられました。

◎昭和60年度事業計画から

◎企画展「間宮喜十郎」展の開催

九月一日から翌年一月七日まで4階企画展示室で開催します。沼津宿本陣を勤めた間宮家の長男として嘉永三年に生まれた間宮喜十郎は、沼津兵学校附属小学校に学びました。明強舎や沼津賢の校長を歴任し、多くの著作を残し

「沼津文庫」と名付けた図書館の創設や「沼津新聞」の創刊をするなど、四十六歳の短い人生を果敢に生きた姿を紹介します。また、間宮本陣の貴重な資料も初めて公開されます。

●歴史講座「沼津兵学校」の開設

市内では今「兵学校ブーム」とも呼べる程関心を集める沼津兵学校。静岡徳川藩の藩校として創設され、近代的教育のモデルとまでいわれる兵学校を、維新の歴史や、教育史、医学史、関係人物の活躍など多角的な方面から掘り下げ、連続講座として開催します。講師は大学教授など現在交渉中。

●「古文書解読入門講座」の開設

古文書を初めて読む方を対象に入門講座を開きます。郷土史料をテキストに連続講座として6/8・22、7/6・20、8/3の計5回、午後2〜4時に講座室で開きます。お申込みは当館へ。

●資料集「江原素六旧蔵明治・大正名士書簡集」の刊行

江原素六と交友のあつた明治大正期の名士の書簡を江原家旧蔵資料の中から解読し紹介します。

◎5月19日当館無料開放します。

この日は江原素六の命日にあたり、駿河台墓地で墓前祭が開かれます。当館ではこれを記念して観覧料を無料とします。これを機にこぞつて足をお運び下さい。

◎定期購読のおすすめ

「明治史料館通信」は年4回発行し、館玄関等で無料配布いたしますが、継続してお読みになりたい方は、住所、氏名、郵便番号明記の上、2年間分の郵送料として60円切手8枚同封して当館あて封書でお申込み下さい。

◎明治期地方新聞マイクロ資料公開のお知らせ

館では59年度事業としてつぎのような明治時代の県内新聞資料のマイクロ化を行い、5月1日より資料閲覧室で公開します。県東部では初の公開施設。ご利用下さい。●重新静岡新聞(明9〜17) ●函右日報(明12〜18) ●静岡大務新聞(明17〜25) ●静岡民友新聞(明30〜昭16) ●静岡新報(明36〜39、44、大2〜昭16) ●東海晩鐘新報(明14〜20)但し欠号あり。資料複写料は一枚50円。(表紙題字は書道家関素山先生)

沼津市明治史料館通信 創刊号

編集 沼津市明治史料館 発行

〒410 沼津市西熊堂372-1

☎〇五五九(2)三三三五